

イギリス庭園見聞録

学長 大口 邦雄

1. 旅の動機

筆者は2003年6月の上旬から中旬にかけて、およそ1週間英国に出張した。目的は二つあった。毎年、園芸短期大学の学生を夏期実習に送り込んでいる Brooksby Melton College を表敬訪問することと、名だたるイギリスの庭園を巡ることである。

私は以前 Cambridge で1年研究していたことがあり、その後も数回英国を訪れた。その度に Cambridge の College の庭や Botanical Garden、London の Kew Garden、Hampton Court、Blenheim Palace など、イギリス庭園の美しさに感嘆し、Cotswold のひっそりした小さな古い町や、林や牧場や小川の風景に惹かれ、初めて見る土地に、まるで生まれ故郷でもあるかのような懐かしさを覚えたのである。以来、私の心の中に一つの疑問が生まれた。なぜ、あの国はあのように美しく、しかしなぜ、日本は町も村も田園も美しくないのか。

2003年3月、森山倭文子氏と高崎の山口美智子先生を訪ねたとき、イギリスの庭園巡りの旅を思い立った。というのは、いま恵泉は園芸の将来をどうするのか大いに悩んでいるが、園芸の目標はいったいこのままでよいのか、短期大学で伝統的にやってきた教育を、そのまま復活することが本当に目標なのか、これからの園芸の需要が、どういう社会層の間に、どういう形で起こるのか、それに応えられるような教育が考えられているのか、といった戦略上の問題は、必ずしも十分考えられていないように思われ、園芸に関わる人々だけでなく、恵泉に関わる人々すべてが、恵泉の園芸の理想についてど

のようなイメージを具体的に描こうとするのかを、はっきりさせておく必要があるように思えたからである。もし、それが明確にされ、それを実現しようとする意志と熱情をよびおこすことができれば、多少の紆余曲折はあっても、長い間には必ずそれを目指す研究・教育活動に収束してゆくのであろうけれども、そのような将来像を共有していなければ、いくら短期大学を続けたとしても、所詮いつかは滅び行く運命を辿ったのではないかと考えたからである。そのために、河井道が強い憧憬を抱くもととなったイギリスの園芸学校の実情を視察し、いま述べたような観点から、いろいろな庭園を視察して、よく観察して来たいと考えた。森山さんは早速私に、庭園に関する資料をどっさり送って下さって、ここは是非見ていらっしやい、という庭園に印をつけて下さった。そこでその資料をもとに、旅の計画を立てたのである。英国の庭園は、開園する季節や曜日、時間がまちまちで、細かく決まっているから、この資料はたいへん役に立った。季節はもっとも花の多い6月と決めた。

2. Brooksby Melton College 訪問

6月5日の夕方 Heathrow 空港で車を借りて、その夜は Cambridge の少し北にある Burwell という小さな町の B&B (Bed and Breakfast の意味で、朝食だけサービスする、通常は個人の家と変わらない小さな宿) に泊まり、翌日 England のまん中に近い Leicestershire の Melton Mowbrey という町にある Brooksby Melton College を表敬訪問した (図2)。先方の窓口になっている方は Ms. Naomi Starachan という花卉装飾の先生と聞いていたが、多分通訳のためであろう、日本人の若い女性を伴って、にこやかに迎えてくれた。もう一人 30代くらいの Andrew というがっしりした男性の Gardener が一緒に実習地を案内してくれた。興味深かったことは、条件の異なるいろいろな花壇を作り、実習をさせていることである。平地あり斜面あり、樹木と一緒にのところもあり、乾燥した土地、水辺の土地、わざわざやや酸性度を高くした土壌の畑などである。種々の条件に応じて、それに適合する花の種類や、花壇の造り方などを実習によって学べるように工夫しているのであろう。

昼食は、行政に責任を負う男性の教授二人と、庭園の歴史を講じておられる品のいい老婦人の教授と一緒にであった。どこの学長さんも多忙と見えて、食事の終わる頃 60 代と思われる女性の学長さんがちょっと挨拶に来られた。



図2 Brooksby College 風景

私はテーブルにいる方々に College の状況を種々尋ねてみた。英国の College はみな私立である。Melton と Brooksby の二つのキャンパスに分かれ、Melton の方は文系の専門領域からできているらしく、Brooksby の方は、園芸だけでなく、牧畜や水産もやっている。実際すぐ近くに大きな湖がある。学生数は二つのキャンパス合わせて全部で 750 名、これに非常勤の学生が 2000 人以上いるとのことだった。教員は専任が 70 名、非常勤教員の数は正確には知らないようだったが、園芸関係だけでも、助手のような人達がかなり大勢いるようである。教員対学生比を考えると、ほとんど日本の国立大学並みである。財政について尋ねると、私立とはいえ公的助成が全体の収入の

60—70%を占め、残りは結婚式場や、苗の大きな販売所などの事業収入と、国内の農業、漁業団体から得られる援助とでまかなわれているようである。学生の授業料に依存する割合はあまり大きくないことがわかった。このあたりは、日本の私立大学とは全く事情を異にする。

園芸の学生のプログラムは2年制で、短期大学と同じである（Collegeは通常3年）。学生数は学年に70人ほどで、男女の割合は半々である。ただし、花卉装飾などはほとんど女性とのこと。しかし、非常勤の学生は非常に多くて、どのくらいいるか把握してない様子であった。非常勤の学生の年齢は30—60歳代に広く広がり、ただ主力は30代と聞いた。学ぶ動機は様々で、半分は新しいキャリアを求めて来る学生で、残りの半分は、言わば教養として学びたい、つまり家庭園芸が目的のようである。また、非常勤にはいろいろな型があり、宿泊つき短期集中型もあるそうで、これを何度か繰り返すと、0-level や A-level 相当の資格がとれるようになっている。寮は男女10人ずつが一つのユニットになった寮が三つある。これらのことは、園芸に関わる学科を作る場合のカリキュラムや教育形態を考える上で参考になることがいろいろ含まれているように思われた。

食後、道路を挟んで向かいにある、Collegeの経営する大きなnursery shopに案内された。規模の大きいこと、すべてが整然としていることが印象的だった。

3. 庭園巡り

この日はYorkの少し北のTerringtonという小さな村のFarm Houseに泊まった。日本人の泊まり客は珍しいらしい。翌日North YorkshireのRiponにあるNewby Hallを訪れ、その夜はRiponの北のEllingstringというこれも小さな村にあるB&Bに泊まり、翌日はDerbyshireのBakewellにあるChatsworthのGardenを訪ねた。Chatsworthは騎士というより貴族の館であるから規模の壮大さに感嘆した。花壇を囲むhedgeが美しく巧みなことと、温室とは思えない美しいガラス張りの温室に、いまは必ずしも盛んではなくなった種のバラを保存しているのが珍しかった。その夜はStratford upon

Avon のホテルに泊まり、次の日は South Cotswold の Cirencester にある Barnsley House Garden を訪れたが、ここはその館をホテルに改造する工事が終わっておらず、Garden にも入れなかった。おかげで、この辺りで最も美しいといわれている Bibury の村や、Burton on the Water の町を訪れた。この辺りは、村や町がどこもかしこも庭園か公園のように美しい地方である。天気にも恵まれて、素晴らしい一日だった。その夜は Chipping Campden に近い Mickleton という小さな村の B&B に泊まり、翌日 North Cotswold の Hidcote Manor Garden に行った。ここは家の形や動物の形など、とても凝った樹木のトリミングが目を惹いた。その夜は Oxford のホテルに泊まり、次の日 London の少し南の方にある RHS Garden Wisley を視察した (図3)。



図3 王立園芸協会の Garden Wisley

ここは Royal Horticultural Society の Garden であるから規模も大きく、一際美しい庭である。白、赤、黄に分かれた広いバラ園があり、正に美しい

花の盛りだったが、天国もかくやと思われるほどの芳香が特に印象的だった。その夜はその少し南の Walliswood というこれまた小さな村にある B&B に泊まり、翌日は Sissinghurst Castle Garden に行った。手許の資料では水曜日が休みということだったが、行ってみると木曜日も休みで、この日は木曜日だったため、残念ながら見学できなかった。他に何組も車でやって来た家族がいて、しきりにぶつぶつ言っていたから、土地の人でもこういう情報は必ずしも正確ではないと見える。やむをえず、すぐ近くにある Leeds Castle へ行き、お城と庭とを見て来た(図4)。



図4 Leeds Castle 庭園の白バラ

庭はそれほどでもないが、城館の窓から眺められる庭のバラが、堀の水や白鳥の優美な姿と、美しい景観をなしていた。後は、Canterbury に一晩泊まり、一日だけ Amsterdam を見物し、チューリップの球根など買い込んで帰途についた。

4. 観察と感想

最初に Brooksby Melton College を訪ねた日が雨模様で寒かったのと、Chatsworth でものすごい夕立に遭って、一時間ほどショッピングストアに閉じ込められたのを除けば、あとはたいへん天気にも恵まれて暑いくらいだった。どこも、花が真っ盛りで、色とりどりによく咲いていた。驚いたことは人の多かったことである。Newby Hall は週末だったが、あとは週日で、随分辺鄙なところにある庭園なのに、開園と同時におびただしい車がほとんど列をなさんばかりにやって来て、広い駐車場をみるみる埋め尽くしてしまうのには驚いた。何と庭の好きな人が多いことか。駐車場といっても、別に舗装がしてあるわけでもなく、ただの草原の地面に縄など張った程度のものである。Chatsworth は貴族の堂々たる館であるが、車の間を鶏が沢山歩き廻って餌をつついていた。

私は English Garden は初めてではないし、それに恵泉園芸センターの蓼科ガーデンは、今度巡った庭園にくらべれば規模においては及ぶべくもないものの、デザインといい、色彩のとり合せといい、手入れの良さといい、建物との調和といい、借景のすばらしさといい、イギリスの庭園に決してひけをとるものではない。だから普通の人ほどイギリスの庭園を感嘆して眺めてきたわけではないが、幾つか気がついたことを感想として述べておこう。

まず花壇が、どこにでもありそうな自然の情景の一部のように造られていることである。そして要所に粗末な風情のベンチなどが置かれていて、そこで一日のんびり坐って読書でもしていたくなるような雰囲気がある。この手法は名のある特別な庭園ばかりではない。Newton はそういう庭に寝そべっていて、林檎の実の落ちるのを見て万有引力の法則に思い到ったというエピソードがあるが、この国の College の庭はみなこのような雰囲気に造られていて、読書や瞑想に耽る学生の姿が見られる。日本の大学の舗装を敷き詰めた殺風景な庭とは大違いである。何にいったいお金をかけるべきか、われわれはもっと考えなければならない。そういう問題と園芸は本来繋がっているのである。また、本来花壇ではない、なんでもない川沿いの道が実に美しい。そこでは樹木と草花とがうまく共存していて、自然そのもののようでありな

がら、実はほどよく手入れされているのである。しかし人工的な感じが全くない。このようなあり方は、この国のたとえば普通の国道でも見られる。道路の両脇は丁度道幅くらい樹木が払われて草原になっている。その先は林であるが、樹木がいっぱい枝を伸ばしても道路には達しない。並木の枝を無惨に伐ってしまうような手入れはしないのである。まして見苦しいガードレールで景観を壊すようなことはしない。人の通る遊歩道は、全く別に造られているようである。

どこの庭園も樹木が多くて、一日中小鳥がしきりに囀っている。樹齢何百年ともしれない、非常な大木が実に多い。それらが、一本一本、精一杯枝を延ばせるだけの空間を与えられてのびのびと美しい樹冠を描いている様が珍しく思われる。気をつけてみると、庭園のあちらこちらに、次の代の同じ種類の若い木が植え込まれていて、しかも、大きくなっても枝がぶつからない程度に間隔をあけて植えられている。その樹木が巨大な木になるには、二代か三代はかかるだろう。以前、ある城館を訪ねたとき、居間の窓から遥かに見渡せる山の斜面の松の木の、全体のほどよい配置が、実に美しい景観をなしているのを見て、あれは自然に生えていたのか、それとも植えたのかと尋ねると、勿論植えたのだということだった。30年、50年先の景観まで考えて、庭園が計画され、樹木が植えられているのである。われわれは、そういう観点から美しい樹木を庭に植えることを考えているだろうか。一般に日本の庭園では樹木が込み過ぎている。

美しい庭園というのは、京都などもそうであるが、たいてい借景をしている。イギリスでは、庭園のずっと向こうに広がる田園の風景が、人工的な大きなものが何一つない、どこまでも緑の牧場や畑なので、それらが美しい背景となって、庭園の美しさを邪魔していないことに気付く。また、仮に家屋が点在していても、屋根の色や壁のレンガの色など、様式に統一があるので、決してイギリス風の風景を乱すことがない。ましてや、みっともない大きな広告や、醜い大きなコンクリートの建物が風景を乱すことのないようにできている。つまり、庭園は決して孤立して存在するのではなく、国土全体が美しく整えられていることに気がつくのである。これは私がもう20年以上前、

はじめてイギリスを訪れたとき、いち早く感じたことであった。

特に、Cotswold の町や村に典型的に見られるように、特別な庭園だけでなく、こういった何でもない村や町の一軒一軒の家の庭が、小さいけれども実に美しいことに気がつく。それを石塀などで囲い込んだりしていないので、町や村の風景が美しい。そういうことを彼らは当然のことのようになっているのである。その感性の高さというものが広範に存在するからこそ、庭園の愛好者が多く、逆にまた庭園から多くのものを学ぶことで、美感に対する感覚の水準が高く保たれているのであろう（図5）。



図5 Cotswold の民家 (Chipping Campden)

こう見てくると、園芸というものは、単に花を作るとか、家庭菜園を楽しむとかいう問題だけではなくて、それぞれの家庭における建築の意匠、室内装飾、家具や調度の色彩や様式、さらに町や村の景観、そういった人間生活の全領域にわたる、ある美的感覚によって造型されるあらゆるものと深く関

わり合って始めて意味を持つことがわかる。これを理解するには B&B に泊まってみるのが一番よい。なぜなら B&B とは、建物は普通の家庭の家をただそのまま使い、室内の装飾、ベッドルームからバスルーム、リビングルームまで、天井や壁紙やテーブル、カーテン、食器の類、そういったものがイギリス人の家庭のように美しく設えられていて、だからホテルと違って、まるで自分の家にいるように感じられることを売り物にして成立しているからである。勿論グレードの高いものから低いものまで様々あるが、今度泊まったところは、その点も考えて選んだためか、実に美しく整えられているところが多かった。その延長上に園芸があるのである。実際、B&B の御主人や奥さん方は園芸をたしなみ、手入れの行き届いた、目を丸くするほど美しい庭を持っている (図6)。



図6 B&B の庭 (North York Shire)

私が、人文的園芸という言葉を使ったとき、何か土から離れて、きれいごとばかりやるように誤解した人が多かったようであるが、そうではない。園芸の農学的技術は絶対に必要である。しかし、それだけいくらやっても園芸にはならないということである。もっと広く人間の文化的営みの中において園芸を位置付け、それを町や村の景観の問題や、自然と人間とが長い時間をかけてほどよく互いに交渉しあいながら、一つの快い環境をつくり上げて行く営みの中で考えられなければならないのである。

では、誰がいったいその担い手になるのか。私は庭園を訪れている人々を注意深く眺めた。週末に訪れた Newby Hall などでは、赤ちゃんを連れた若い母親とお祖母さんといった組合せや、子供を連れた若い夫婦の姿もあったが、まず9割は60代を超える夫婦である。しかも、お金にはあまり困らず、自分で園芸をたしなむ人々に違い無く、しきりにそのような会話を交わしていた。すると、日本でも、これからの園芸の担い手の主体は、やはり主たる職業を終え、おそらく都市近郊に庭を持って住む、この年代の人々であろう。まず、水準の高い園芸についての理想を理解する、言わば質の高い消費者を生産することが先決であろう。

Wisley Garden で gardner の一人に、ここにはいったい何人の gardner がいるのかと尋ねたところ、専任が70人、非常勤が80人と答えた。非常勤はやはりシルヴァー世代だということで、そう言えば Sissinghurst Castle の壁に、ボランティアを求める広告が出ていた。これらの人々は、労力を提供して、愛する庭園を善意で支えると同時に、その経験が大いに自分の家の庭のために役立つのであろう。

もう一つ考えたことは、一年間の庭園の入場者の数を大ざっぱに見込み、入場料(6.5ポンド)から計算してみても、絶対に70人の専任の gardner の人件費を賄うことはできないということである。経営責任者に尋ねてみないとわからないが、National Trust であるとか RHS のような会員の組織があって、基本的に支えているのであろう。われわれも、蓼科ガーデンのような美しい庭を、半恒久的に支えようと思えば、これに類する組織を恐らく必要とするであろう。コマーシャルベースでは所詮よいものは支えられないものと

思われる。庭園の見学は、物見遊山ではなく、庭園の価値を本当に理解する人々に、美しさの高い基準を実際に示してみせるところにある。開館の季節や時間を制限しても、来たい人は必ずやってくる。

5. 結び

恵泉の園芸が難しい岐路に立っていることは確かである。しかし、問題を恵泉の園芸をいかに保つか、ということに限ってしまうのでは、社会に対して十分訴えることはできないであろう。所詮それは一部の人々の間だけの、閉じられた問題意識だからである。そうではなくて、本来恵泉は、この国の社会に対して、園芸を通じていかなる使命を担おうとするのか、ということではなければならない。

思うに日本は、アジア太平洋戦争に敗れたあと、軍事力ではなくて、経済力において欧米先進国の水準に追いつきたいと考えて、非常な努力をし、実際成功もしたのである。しかし、バブルがはじけてみると、物質的豊かさだけでは、人の心は豊かにならず、幸せにならないことを知ったのではなかったか。21世紀の日本人にとって、本当に必要なのは、心の豊かさである。心の豊かさに繋がる質の高い生活様式を創造することである。それには、経済性最優先の原則を変更して、われわれの生活環境を、美しく豊かなものに創造してゆくことが必要で、英国をはじめヨーロッパ先進国では、蓄積した富をそのような目的に使っているように見える。

英国をはじめヨーロッパを旅して感ずる国土の美しさを、私たちの国にもとり戻したい。もはや貧しいとはいえないわれわれ日本人が、身の回りに高い水準の美しさを、自然との共存において創出することは、平和で優しい社会をつくり、平和を愛する若者を育てるのに必要な環境を提供するのに役立つであろう。恵泉の園芸は、そのような目的意識の中に正しく位置付けられて初めて、すべての人々が共有できる将来像を持つことができるようになる。このような考え方において、恵泉に関わるすべての人々が一つの合意に達することこそ、何より必要なことと私は考える。 (学長 兼 学園長)